

新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿 (一)

奥野 陽子

情報科学部 情報システム学科  
(2008年9月29日受理)

Commentaries on the Works of the *Shin-gū Senka-awase* (Part 1)

by

Yoko OKUNO

Department of Information Systems, Faculty of Information Science

(Manuscript received Sep 29, 2008)

**Abstract**

The purpose of this paper is to compare various texts of the *Shin-gū* poetry contest and provide notes on the poems and judgements given in the contest. The poems were selected in the third month of the first year (1201) in the *Kennin* period. It was just before the compilation of the *Shin-Kokin Waka-shū* got into full swing. This contest was undertaken by *Gotoba-no-in*, who was later to order the compilation of the *Shin-Kokin Waka-shū*. The central figures of the *Shin-Kokin Waka-shū* selection participated in this contest. The participants made criticisms of each other's works anonymously. Nine works from the contest were later included in the *Shin-Kokin Waka-shū*. Therefore a careful interpretation of each poem of the contest is also essential to understand the *Shin-Kokin Waka-shū*.

キーワード; 和歌, 新宮撰歌合, 注釈

**Keyword;** Tanka, *Shin-gū Senka-awase*, Commentary

## 新宮撰歌合 建仁元年三月 全注解稿(一)

情報科学部 情報システム学科 奥野 陽子

(二〇〇八年九月二十九日受理)

### 一

新宮撰歌合は、建仁元年二〇一 三月二十九日に、二条殿御所で、後鳥羽院が主催した歌合である。その四ヶ月後の七月二十六日には、新古今集編纂に関わる和歌所が設置されることになる。本歌合は、六条家系歌人は後退し、和歌所寄人となる良経・通親・慈円・俊成(釈阿)・具親・長明・隆信、撰者となる通具・有家・定家・家隆・雅経・寂蓮、和歌所開闢となる家長ら、新古今集撰集の主力メンバーが中心となつて行われており、俊成の判詞もその意味で注目される点が多いとされている(松野陽一『藤原俊成の研究』昭和四八年三月 笠間書院)。本歌合からは新古今集に九首が入集している。

成立の経緯については、明月記同年三月二二日・二七日〜二九日条に詳しい。定家の記述は右方についてのものであるが、左方も同様であろうと思われる。撰歌は左右に分かれてなされ、初めに作者を隠して撰歌した。次に撰ばれた歌のみに作者を付し、歌人など勘案して調整し、左右各三六首、計七二首を選んで、結番した。歌題ごとに歌数を調整してないので、左右異題で結番されていることがある。その上で、作者の名を隠して評定が行われた。判者は俊成、定家が書記を勤めた。

この作者隠名、褒貶という条件で行われたということも、新古今歌人たちの姿勢や好尚を考える上で重要であるとされている(有吉保『新古今和歌集の研究―基盤と構成―』昭和四三年四月 三省堂)。

本歌合が、新古今和歌集理解に欠かせない歌合のひとつであることはいうまでもないが、本歌合についてのまとまった注釈というのはまだない。本稿は、これに順次注解を試みるものである。全三六番のうち、今回は七番までを扱う。

本歌合についての研究には、前掲の両書の他に、『図書寮典籍解題続文学篇』(昭和二五年三月 養徳社)、峯岸義秋『歌合の研究』(昭和二九年一〇月 三省堂)、同『群書解題』(昭和三九年一月 続群書類従完成会)、後藤重郎『歌合より見た新古今和歌集撰者選定に関する一考察』(『名古屋大学文学部研究論集』八号 昭和三五年二月)、松野陽一『新編国歌大観』解題(昭和六二年四月 角川書店)などがある。また、影印本としては山本一編『京都府立総合資料館蔵 仙洞十人歌合他二種 神宮文庫蔵 建仁歌合』(平成元年一月 和泉書院)が出ている。松野氏によれば、朝原則夫氏による未刊校本原稿が存在するよしである。多くの伝本があるが、すべて同一系統本であるとされている(松野氏前掲両書)。

『新編国歌大観』の底本は、流布本としての善本として国立公文書館内閣文庫などに蔵される貞享二年刊『歌合部類』本を採用している。現段階で、底本とすべき卓越した写本を見出しがたい状況であるので、本稿では、ひとまずそれに倣い、他本で校合して、本文を検討しつつ、注釈をすすめていくことにする。刊本は内閣文庫本(二〇一・一四七)を用いた。校合した写本は、次の通りである。書名の下の記事は所蔵者の整理番号である。↓印の下に本稿での略称を示す。校異は、和歌についてはすべて掲げるが、複数の写本が同じ本文である場合、用字については先頭に掲げるものに従う。和歌以外の部分(難陳、判詞)の校異については、細かい異同が多く煩雑を極めるため、私意により主要な部分のみを和歌の校異の後に記すことにする。目次・集付・歌題・作者名の校異は省略する。

宮内庁書陵部本

五〇一・五八四

↓ 宮

京都府立総合資料館本 (前掲 和泉書院影印叢刊 73 による)  
 特費八三一・五一 ↓ 京  
 水府明德会彰考館本 (国文学研究資料館紙焼写真による)  
 巳・一二 ↓ 彰

国立公文書館内閣文庫本 (国文学研究資料館紙焼写真による)

二〇一・二〇九 ↓ 内

刈谷市中央図書館村上文庫本 (同右) 一六七一 ↓ 刈

神宮文庫本 (同右) 三・九八二 ↓ 神

島根大学附属図書館桑原文庫本 (同右) 九一一、一八・Sh六二 ↓ 桑

祐徳稻荷神社中川文庫本 (同右) 六・二一二・一二七四 ↓ 中一

(資料館書誌ID一〇〇一八六〇六二) ↓ 中一

祐徳稻荷神社中川文庫本 (同右) 六・二一二・一二七四 ↓ 中二

(資料館書誌ID一〇〇一八六〇六四) ↓ 中二

熊本大学付属図書館北岡文庫本 (同右) 一〇七・三六・七 ↓ 北

篠山市立青山歴史村本 (同右) 二五〇 ↓ 青一

篠山市立青山歴史村本 (同右) 一九一 ↓ 青二

肥前嶋原松平文庫本 (同右) 一三八・五三 ↓ 松

本文の校訂は、底本が明らかに誤写・誤脱したと認められるもの限り、その旨を校異の欄に示す。

本文は、読解の便宜上、次のように処置した。

・用字は通行字体に改めた。

・仮名遣いは底本のままとし、歴史的仮名遣いと異なる場合には、歴史的仮名遣いを( )に入れて傍記した。

・私意により清濁を区別し、句読点・「」等を付した。

・仮名には、適宜漢字を宛てたが、底本の仮名表記を振り仮名として残した。

・反復記号は底本のままとした。但し、品詞が変わる場合と、漢字を宛てることで送り仮名となった場合は仮名に改め、記号は振り仮名として残した。

・難読漢字その他には、( )内に読みを記し、漢文体の箇所には訓点を施した。

・底本の改行とは無関係に、難陳と判詞の箇所改行した。また、一行空きにするなど、割付を多少変更した箇所がある。

・和歌には、新編国歌大観番号を付した。

・注釈は、校異・他出文献・通釈・本歌の順に掲出し、その後〇を付して、語や句を挙げ、語釈にとどまらぬ、一首の詞統きや修辭などから生じる意味について解説した。さらに補説や考察がある場合は▽以下に記した。

・引用は、和歌・漢詩・歌合等は新編国歌大観、古来風体抄等の歌字書は日本歌学大系、伊勢物語等の物語類は新編小学館日本古典文学全集に拠った。但し、私意により表記を改めた場合がある。

二

新宮撰歌合 建仁元年三月二十九日

作者隠名 褒貶

題

霞隔遠樹 霧中見花 雨後郭公  
 松下晚涼 山家秋月 湖上曉霧  
 嵐吹寒草 雪似白雲 遇不逢恋  
 寄神祇祝

左方

左大臣 後京極良経 内大臣 通親 權中納言公繼

积阿 越前 嘉陽門院官女 散位隆信

左近衛中将通具 散位有家 散位保季

上総介家隆 寂蓮 鴨長明 禰宜長繼男

賀茂季保

右方

女房 後鳥羽院 前権僧正慈円 權大納言忠良

權中納言兼宗 参議公経 太宰大式範光

宮内卿 後鳥羽院官女 讚岐 二条院官女 丹後 宜秋門院官女

左近衛権中将定家 左近衛権少将雅経

左兵衛佐具親 右馬助家長

読師 左方 左近衛中将通具  
右方 参議公経  
講師 左方 上総介家隆  
右方 左近衛権少将雅経  
判者 皇太后宮大夫入道积阿

## ○作者略歴

左方

左大臣——後京極(藤原)良経。嘉応元年(一一六九)元久三年(一一〇六)三月七日、三八歳。本歌合当時三三歳。撰家相統流、関白太政大臣九条兼実二男。母は藤原季行女。慈円の甥。従一位撰政太政大臣に至る。和歌所寄人。新古今集仮名序筆者。家集は秋篠月清集。新古今集に七九首入集。千載集初出。

内大臣——土御門内大臣。源通親。久安五年(一一四九)建仁二年(一一〇二)五四歳。当時五三歳。村上源氏。内大臣源雅通長男。母は藤原行兼(長信)女。正二位内大臣に至る。和歌所寄人。後白河から土御門まで七代の天皇に仕え、後鳥羽院治世下で政界に権勢を得た。和歌は六条季経に師事。新古今集に六首入集。千載集初出。

権中納言公継——藤原公継。安元元年(一一七五)嘉禄三年(一一三二)一月三〇日、五三歳。当時二七歳。北家公季流、左大臣藤原実定男。母は上西門院女房備後。従一位左大臣に至る。新古今集に五首入集。新古今集初出。

积阿——藤原俊成。初名顕広、积阿は法名。永久二年(一一二四)元久元年(一一〇四)十一月三〇日、九一歳。当時、八八歳。北家長家流、権中納言俊忠の三男。母は藤原敦家女。一〇歳で父と死別後、葉室家の養子となり、五三歳で本流に復す。正三位皇太后宮大夫に至る。歌壇の重鎮として新古今歌風形成に大きな役割を果たした。和歌所寄人。千載集撰者。家集は長秋詠藻。歌論書は古来風体抄。新古今集に七二首入集。詞花集初出。

越前——大中臣公親女。生没年未詳。建長元年(一一四九)には生存。初め後鳥羽院生母七条院殖子に、後に後鳥羽院皇女嘉陽門院礼子に仕

えた。後鳥羽院に拔擢され、新古今集に七首入集。新古今集初出。

散位隆信——藤原隆信。康治元年(一一四一)元久二年(一一〇五)二月二七日、六四歳。当時六〇歳。北家長良流。皇后宮少進為経(寂超)男。母は藤原親忠女(美福門院加賀。俊成と再婚し、成家・定家を生む)。正四位下右京権大夫に至る。和歌所寄人。隆信集(家集)、うきなみ(物語、散逸)、弥世継(歴史物語、散逸)の作者で、似絵の名手でもある。新古今集に三首入集。千載集初出。

左近衛中将通具——源通具。承安元年(一一七一)安貞元年(一一三二)九月二日、五七歳。当時三一歳。村上源氏。土御門内大臣源通親二男。母は平教盛女。正二位大納言に至る。俊成女と結婚したが、正治元年(一一一九)頃父の指示で承明門院妹按察局信子を嫡妻とした。和歌所寄人、同別当。新古今集撰者。新古今集に一七首入集。新古今集初出。

散位有家——藤原有家。久寿二年(一一五五)建保四年(一一二六)四月一日、六二歳。当時四七歳。北家末茂流。太宰大式重家三男。母は藤原家成女。従三位大藏卿に至る。六条藤家の有力歌人であったが、御子左家が歌壇の中心となつてからも地位を失わなかった。和歌所寄人。新古今撰者。新古今集に一九首入集。千載集初出。

散位保季——藤原保季。承安元年(一一七一)没年未詳。当時三二歳。北家末茂流。太宰大式重家男で叔父季経の養子となる。母は藤原家成女。非参議従三位左馬権頭に至る。新古今集に三首入集。新古今集初出。

上総介家隆——藤原家隆。保元三年(一一五八)嘉禎三年(一一三二)四月九日、八〇歳。当時五九歳。北家長門流。権中納言光隆二男。母は藤原実兼女。建永元年(一一二六)宮内卿、文暦二年(一一三五)従二位に至る。和歌所寄人。新古今集撰者。家集は壬二集(玉吟集)。承久の乱で後鳥羽院が隠岐に配流された後も、後鳥羽院と交流を続けた。新古今集に四三首入集。千載集初出。

寂蓮——俗名藤原定長。保延五年(一一三九)頃——建仁二年(一一〇二)七月二〇日、六四歳か。当時六三歳か。北家長家流、俊成の兄弟阿闍梨俊海男。母未詳。一時、俊成の猶子であった。従五位上中務少輔に至る。承安二年(一一七二)頃出家。和歌所寄人。新古今集撰者とな

つたが、撰進以前に没。家集は寂蓮集。新古今集に三五首入集。千載集初出。

鴨長明——法名、蓮胤。生年未詳（一説に久寿二年一二五）——建保四年二二六 閏六月八日、六二歳か。当時四七歳か。鴨御祖神社禰宜鴨長継男。従五位下に至る。和歌の師は俊恵。和歌所寄人。元久元年二〇四 出家、大原に隠棲、その後日野に移り方丈記を著す。家集に鴨長明集、その他に無名抄、発心集などの著作がある。新古今集に一〇首入集。千載集初出。

賀茂季保——生没年未詳。賀茂重保男。新古今集に一首入集（一七七三 但し父重保の歌とする本あり）。新古今集初出。

右方

女房——後鳥羽院のこと。治承四年一一八〇 七月一日（一四日とも）——延応元年一二三九 二月二日、六〇歳。当時、二二歳。第八二代天皇。高倉天皇皇子。母は藤原信隆女、殖子（七条院）。寿永二年二八三 践祚、建久九年一二九 讓位し、院政を開始する。承久三年二二二、承久の乱に敗れ、出家。隠岐に配流となり、同地で没した。正治二年二二〇 より院歌壇の主権者、実作者として活動し、新古今集撰集を下命、自らも精選に当たる。新古今集を隠岐で改訂（隠岐本新古今集）。歌論に後鳥羽院御口伝、家集に後鳥羽院御集がある。新古今集に三三首入集。新古今集初出。

前権僧正慈円——俗性藤原。法名は初め道快。諡号、慈鎮。久寿二年二五五 四月一日——嘉禄元年一二三五 九月二五日、七一歳。当時、四七歳。撰家相統流。関白太政大臣忠通男。母は藤原仲光女。兼実の同母弟。良経の叔父。天台座主を四度勤める。後白河院、後鳥羽院の護持僧。和歌所寄人。家集は拾玉集。愚管抄の著者。新古今集に九二首入集。千載集初出。

権大納言忠良——近衛（藤原）忠良。長寛二年一二六四——嘉禄元年一二三五 五月一日、六二歳。当時三八歳。撰家相統流。六条撰政基実二男。母は藤原頭輔女。正二位大納言に至る。新古今集に五首入集。千載集初出。

権中納言兼宗——藤原兼宗。長寛元年一一六三——仁治三年一二四二 九月三日、八〇歳。当時三九歳。北家師実流。内大臣中山忠親男。母は

藤原光房女。正二位大納言に至る。新古今集に二首入集。千載集初出。

参議公経——西園寺（藤原）公経。承安元年一一七一——寛元二年一二四四 八月二九日、七四歳。当時三一歳。北家公季流。西園寺実宗二男。母は藤原基家女。姉が定家室。従一位太政大臣に至る。鎌倉幕府縁辺の者として、承久の乱では内通し、後鳥羽院方の敗北を導いた。新古今集に一〇首入集。新古今集初出。

太宰大式範光——藤原範光。久寿二年一二五五——建暦三年一二三三 四月五日、五九歳（六〇歳とも）。当時四七歳（四八歳）。南家貞嗣流。刑部卿範兼男。母源俊重女。従二位民部卿兼春宮権大夫に至る。新古今集に二首入集。新古今集初出。

宮内卿——生没年未詳。文治元年一一八五 頃——元久二年二〇五 頃、二〇歳くらいか。当時一七歳か。右京権大夫源師光女。母は巨勢宗茂女、後白河院安芸。後鳥羽院女房。院に拔擢され、院歌壇の新星として活躍。新古今集には一五首入集。新古今集初出。

讃岐——生没年未詳。永治元年一二四一 頃——建保五年一二二七 頃、七七歳くらいか。当時六〇歳くらいか。右京権大夫源頼政女。二条天皇に出仕。崩御後、藤原重頼の妻となる。建久年間に、後鳥羽中宮任子（宜秋門院）に再出仕。家集は二条院讃岐集。新古今集には一六首入集。千載集初出。

丹後——生没年未詳。建永二年二二〇七 までは生存。藏人大夫源頼行女。頼政の姪で、二条院讃岐の従姉妹。はじめ九条兼実に仕えて、撰政家丹後と呼ばれ、正治頃から宜秋門院任子（兼実女）に仕える。新古今集に九首入集。千載集初出。

左近衛権中将定家——藤原定家。応保二年一二六一——仁治二年一二四一 八月二〇日、八〇歳。当時四〇歳。北家長家流。俊成の二男。母は藤原親忠女（美福門院加賀）。正二位権中納言に至る。和歌所寄人。新古今集撰者。新勅撰集撰者。家集は拾遺愚草。近代秀歌、詠歌大概、定家八代抄、百人秀歌、頭註密勘など、歌論の著作も多い。日記は明月記。新古今集には四六首入集。千載集初出。

左近衛権少将雅経——飛鳥井（藤原）雅経。嘉応二年一一七〇——承久三年一二三二 三月一日、五二歳。当時三二歳。北家師実流。刑部卿

頼経二男。母は源顕雅女。従三位参議に至る。飛鳥井流蹴鞠の祖。文治五年二八九 父の伊豆配流以後、鎌倉下向。建久八年二一九 後鳥羽院の命で蹴鞠会出席のため上洛。院近習となる。和歌所寄人。新古今集撰者。家集は明日香井集、革羽別記、蹴鞠略記の蹴鞠書がある。新古今集に二二首入集。新古今集初出。

左兵衛佐具親——源具親。生没年未詳。弘長二年二六二 までは生存。村上源氏。右京権大夫師光男。母は巨勢宗茂女、後白河院安芸。宮内卿の兄。従四位下左近少将に至る。正治二年二〇〇、妹同様に院側近歌人の一人となる。新古今集に七首入集。新古今集初出。

右馬助家長——源家長。生年未詳——文暦元年二三四、六〇余歳か。當時、二七歳くらいか。醍醐源氏。大膳亮時長男。母未詳。妻は後鳥羽院下野(信濃)。従四位上但馬守に至る。和歌所開闢として、新古今集撰進の実務を担当した。源家長日記が伝わる。新古今集に三首入集。新古今集初出。

- 詠師——和歌の披講を指導し、懐紙などを講師に渡す役。
- 講師——和歌を披講する役。
- 判者——左右の歌の優劣について批評・判定を下す役。

一番 霞隔遠樹

1 もえ出る梢は峰の草葉にて野への煙とたつ霞かな

左 持 内大臣  
右 女房

2 浦の松の色やまさると春見れば霞ぞたてる志賀の唐崎

左歌を右方に申 云、峰の梢を草葉と見て野への煙と霞をまがへたる心、上下たがひてや聞ゆらん。左方陳 申 云、まことに峰を野へと見るにはあらず。眺望のころろには詩などにもつねにいひならへる事也。右歌を左方ことに申旨なし。

判者申云、左歌、右難 申 旨もふかき難にはあらず。右歌、姿心ことに面白し。但、かつは一番の左歌なれば持とすべし。

【校異】

1 草葉にて—わか葉にて(中一・中二・松・桑)

野への煙と—野辺のかすみと(内・青一)

たつ霞かな—たつけふり哉(内・青一)

2 浦の松の—うらの松(内・京・北・青一)

いろやまさると—風やまさると(内・青一)

春見れば—春見れば(宮)

霞そたてる—霞はたてる(神)、かすみてたてる(内・青一)

難陳・判詞

みねの梢を草葉と—峰の松梢一本無此字を草はに(刈)

野へのけふりと霞を—野への煙を霞と(宮)、野への煙を霞に(内・青一)

青一)

上下—歟下(内・青一)

まことに峰を野へと見るにはあらず—誠峰を草葉とみたるは(内・青一)

一)、まことに峰を野へと見たるにはあらず(京・刈)、誠に峰を野へと見たるにはあらず(桑・中一・中二・松)

眺望のころろには—欠脱(内・青一)

詩などにもつねに—常に詩などにも(内)、常に待るとにも(青一)

右歌を—ふかき難にはあらず—欠脱(内・青一)

ふかき難—わかき難(神)

すかた心ことにおもしろし—心すかたことにおもしろし(宮)、心すかたともにおもしろし(刈)、心姿詞に面白し(内・青一)

但かつは一番の左歌なれば—但しはらく一番の歌なれば(京・北)、

但左の一番の歌なれば(内・青一)

【他出文献】

2 後鳥羽院御集 一五二八(「同三月尽新宮撰歌合、霞隔遠樹」第一句「浦の松の」—「浦の松」)

【通釈】

一番 霞、遠樹を隔つ(霞が遠くの樹を隔てる)

左 持 内大臣(通親)

1 萌え出し芽吹いてくる木々の梢は、山の峰の上の草の葉であって、(一方麓の野辺を見れば)野辺を焼く煙という様子で立っている霞で

1 萌え出し芽吹いてくる木々の梢は、山の峰の上の草の葉であって、(一方麓の野辺を見れば)野辺を焼く煙という様子で立っている霞で

あることよ。

右 女房(後鳥羽院)

2 浦の松の色はさらに濃くなっているだろうかと、春に見ると、なんと霞が立っていることよ、志賀の唐崎よ(松は霞に隔てられて見えないうよ)。

左歌について、右方において申しますことには、峰の梢を草葉と見なして、野辺の煙を霞と見まがえているという主意は、(空間的に)上と下を間違えているように聞こえるだろうか。左方が弁明していることには、本当に峰を野辺だと見ているのではないのだ。「眺望」という主題では、漢詩などにも普通にこのように言いならわしていることである。右歌について、左方は特別に難点として申す旨は無い。

判者が申しますことには、左歌については、右方が難じて申す主旨も、大して深い難点ではない。右歌は、歌の姿も心も特別に面白い。但し、ひとまず、一番の左歌(は勝つのがならい)であるから、引き分けとするのがよからう。

【本歌】

2 ときはなる松の緑も春くれば今ひとしほの色まさりけり(寛平御時后宮の歌合によめる)源宗子 古今集 春上 二四)

○題―一番は左右同題で、「霞隔遠樹」。霞、遠樹を隔つ。霞が遠くにある樹を隔ててかかるの意。本歌合の題は、すべて四字の結題である。「霞隔遠樹」題は、これが初出。後に二条家において重んじられ、難題として詠歌修練の目標となった定家の「藤川百首」(定家六〇〜六三歳の作か)にもこの題は含まれている。後の頼阿判三十番歌合(応安五年一三七二以前)は、本歌合の十題十首を各三番に配して三十番としている。

1 ○もえ出る梢―「もえ出る」は草木が芽吹くことであるが、「梢」に続く例は他に見いだせない。「木の芽」(後撰集一四)、「早蕨」(金葉二七一)、「若菜」(山家集三二)にかかる例がある中に、1で三句に使われている「草(草葉)」の例が多く、その意味で「峰の草葉」への詞

続きは自然である。

・もえいづる草葉のみかは小笠原駒のけしきも春めきにけり(「春駒をよめる」僧都覚雅 詞花集 春 一三)

・もえいづる草のとざしはあけがたし心の奥のうしろめたさに(「なほまたあけさせ給へとあれば」大斎院御集 七)

・もえいづる草のはつかにみつるかなこれや思ひのはじめなるらん(「初恋」重家集一四七)

重家集の例のように、草の萌え出づることを詠んで、火の燃えることの縁語とする例があり、1の四句「煙」の措辞の参考になる。峰の梢をとりあげて題の「遠樹」としている。峰一面の梢が、若草色に芽吹いている春の峰の様子。

○峰の草葉―他に例がない。大きい樹木を小さい草葉に見立てることにより、遠くに小さく見える距離感を表現した。

○野べの煙―ここでは、春の野焼きの煙をいう。春霞のかかるのを野焼きの煙に見立てた。煙は初句の「もえ出る」の縁語。通親は正治初度百首においてもこの詞を用いている。

・まよふなる野べの煙や闇ならん子を思ふ雉子立ちも離れず(春 一九)

霞と野焼きの煙が比喩関係にある歌の例を挙げる。

・いつしかと霞もさわく山べかな野火の煙のたつにやあるらん(「な

ま夕暮に山に霞といみじう立ちたり、霞か煙かなどいへば」宰相 大斎院前御集 二)

・裾野焼く煙ぞ春は吉野山花をへだつる霞なりける(山家集 八五)

・いつしかと焼きてし野辺の霞をば又思ひたつ煙とぞみる(「霞」定宗 別雷社歌合 四三)

草が萌え出る(「燃え出る」)ことそのことを霞と関連させる歌の伝統もある。

・春山の裾野にもゆるさわらびは峰の霞や煙なるらん(「早蕨」頭仲

堀河百首 一三四)

・雪消ゆる荻の焼け原霞みこめたてぬ煙にもゆるわか草(「霞」鴨長

明 正治後度百首 六〇四)

「野辺の煙」は火葬の煙をも意味することがあり、「草葉」も「草葉

の露」などと、哀傷の連想が働く語であるが、俊成はこの点は問題にしていない。

2

○浦の松の—浦の松はここでは志賀の唐崎の湖岸に立つ松をさす。

○色やまさると—色がさらに増さっているであろうかと、の意。本歌の古今歌により、常緑で色が変わらないとされる松も春になるとよりいっそう緑が濃くなることとされていることを、既得の知識として、それを期待して見遣るのである。浦の松の色が増えることを詠んだ先行例に次の歌があるが、これは潮が松の色を染めるとしている例である。

・深緑満ち干て染むる浦の松いづれのしほに色まさるらん（藤宰相

宇津保物語 五二）

○春見れば—本歌を意識して「春」を効かせる。初出例の句で、以後も例は少ない。「秋見れば」も教長集に一例、「冬見れば」も四季恋三首歌合に一例あるのみである。

○霞ぞたてる—霞は春の景物。この句の先行例としては次の頼輔の例がある。句の後には場所が来ることが多い。霞は期待して見た松の緑を隔てるものであるが、それ自体が春のしるしであり、「春見れば」に呼応するものである。

・春来れば杉のしるしもみえぬかな霞ぞたてる三輪の山もと（頼輔千載集 春上 一〇・治承三十六人歌合 七九・頼輔集 六）  
・浅緑春のしるしや三輪の山霞ぞたてる杉の青葉に（家衡 建保名所百首 五二）

頼輔歌も、見えて然るべき杉のしるしを隔て隠すものとして、春霞がかかる様子を詠んでおり、2の参考になる。

○志賀の唐崎—近江国歌枕。現在の滋賀県大津市唐崎、唐崎神社のあたり。

・楽浪之 思賀乃辛崎 雖幸有 大宮人之 船麻知兼津（人麻呂 万葉集 卷一 三〇）

が早い例である。志賀の唐崎の「春」を詠んだ歌としては次の例が早い。

・氷ぬし志賀の唐崎うちとけてさざなみ寄する春風ぞ吹く（「堀河院御時百首歌奉り侍りけるに、春立つ心を詠める」匡房 詞花集

春 一・堀河百首 二）

それまで禊の地として詠まれる程度で歌に詠まれることの少なかった唐崎だが、平安末期には、「志賀の浦」「志賀の山」「長等の山」などの地名と詠まれたり、月や氷などの景物を詠みこんだ叙景的な歌が詠まれたりするようになっていた。唐崎の景物として松を詠むのは、後鳥羽院あたりが最初かもしれない。

・唐崎や氷に浪の音絶えて汀に残る小夜の松風（「冬」後鳥羽院御集 一一三四・建仁元年二月老若五十首歌合 三五二）

・神の誓ひ変はらぬ色を頼むかなおなじ緑の唐崎の松（「雑」後鳥羽院御集 一三四三 元久二年三月日吉三十首御会）

・たちかへり神よの松の陰にして今日の禊は志賀の唐崎（「六月祓の心」祝部成茂 雲葉集 三八〇）

なお後になるが、為家には唐崎の松を詠む例が多い。  
難陳・判詞

○上下たがひてや聞ゆらん—峰で草葉が萌えて（＝燃えて）煙が立っているのに、麓の野辺で霞が立っているのをその煙とするのは、空間的に上下が逆さまではないか、と難じている。

○眺望のこゝろには詩などにもつねにいひならへる事也—例えば、和漢朗詠集「眺望」に「見天台山之高巖 四十五尺波白 望長安城之遠樹 百千万茎薺青」（順 六二六）とあり、遠樹を薺（アブラナ科の二年草。ペンペン草）に喩えるが、この対句の視点は、前句は京都の平地から長安城を仰いだもの、後句は平地を高めから見下ろした遠望であり、句毎に異なっている。これらを念頭においた弁明であろう。

二番

左 持 左大臣

3 ながめこし沖つ浪まの浜椒ひさしく見せぬ春霞哉

右 参議公経

4 新古

高瀬さす六田の淀の柳原みどりもふかく霞む春かな

左歌を右申 云、上に「ながめこし」と置きて下に「見せぬ」と

いへる、同心の病かいかゞ。右歌を左申云、「高瀬さす六田の淀」とはいづこと思へるにか。六田の淀とは吉野川とこそ萬葉集にもよみたれ、「柳原六田の淀」に証歌の侍にや、おぼつかなし。右陳申云、六田の淀の柳、古歌によみならはして侍るにや。左、猶証歌を可し申ス之由申ス。

判者申云、左歌、姿よろしけれども「ながめ」の詞疑ひ有。右歌、「六田の淀」おぼつかなし。又持とすべし。

## 【校異】

4 霞むはるかな—霞む空かな(宮)、かすむ空かな(刈)  
難陳・判詞

同心の病かいかゞ—おなし心のやまひか如何(宮・刈)、同心の病歟如何(内・桑・彰・神・中一・中二・青一・青二・松)、おなし心の病にや(京・北)

よしの川とこそ—吉野川とこそ(神)

柳はらむつたの淀に証歌の侍にや—柳原もむつたのよとに証歌のあるにや(刈・内・青一)、柳はらにむつたの淀に証歌のあるにや(宮)、柳原むつたのよとに証歌のあるにや(京・北)

六田のよとの柳—むつたのよとは柳(京・北)

古歌によみならはして侍るにや—ふるきうたにもよみならはして侍事にや(宮)、ふるき歌によみならはして侍ることによ(刈)、ふるき歌によみならはして侍とかや(内・青一)、古歌に誦ならして侍にや(神)、ふるき歌によみならはしたるにや(京・北)

左猶—左歌(刈)、左方猶(内)

左歌すかたよろしけれともなかめの詞うたかひ有—左歌のすかたよろしければなかめの詞有難(内・青一)、左歌のすかたよろしけれと(京・北)

右歌むつたの淀おほつかなし又持とすへし—欠脱(京・北)

## 【他出文献】

3 秋篠月清集 春 一〇一〇(「院の撰歌合十首内、霞隔遠樹」)・夫木和歌抄 一三八七九(「建仁元年新宮撰歌合、霞隔遠樹」第四句「久しく見えぬ」)

4 新古今集 春上 七二(「建仁元年三月歌合に、霞隔遠樹といふこ

とを)・新時代不同歌合 六四・井蛙抄 三六八・題林愚抄 一七九・新三十六人歌合 一〇二・歌枕名寄 二二七二

## 【通釈】

二番 「霞、遠樹を隔つ(霞が遠くの樹を隔てる)」

左 持 左大臣(良経)

3 これまで眺めてきた、沖の浪間に見え隠れする浜楸よ、それを長い間隔てて見せてくれない春霞であるなあ。

右 参議公経

4 浅瀬を棹さして舟のこぎゆく六田の淀のあたりの柳原よ、(霞の)緑の色も(柳原の緑が映じて)ことに色深く霞んでみえる春であるよ。

左歌について右方が申しますことには、上句に「ながめこし」と置いて、下句に「見せぬ」といつているのは、同心の病にあたるかと思われるがどうだろう。右歌について左方が申しますことには、「高瀬さす六田の淀」とはこのことだと思っているのか。六田の淀とは吉野川にあるところ万葉集にも詠んでいるのであるけれども、「柳原六田の淀」というのに証歌があるのでしようか、不審である。右方が弁明して申しますことには、六田の淀の柳は、古歌に繰り返して詠まれているように思えます。左方は、やはり証歌をこれ

というべきだと申します。

判者が申しますことには、左歌は、歌の姿は結構だが、「ながめ」の詞に疑念がある。右歌は、「六田の淀」の詞がはっきりしない。またこれも引き分けとするのがよからう。

## 【本歌】

3 浪まより見ゆる小島の浜ひさ木ひさしく成りぬ君にあはずて(よみ人しらず 拾遺集 恋四 八五六・万葉集 卷十一 二七六三 第一句「浪の間ゆ」第五句「君にあはずして」)

○題—引き続き二番は3、4ともに「霞、遠樹を隔つ」。

3 ○ながめこし—過去から現在まで引き続き眺めてきた、の意。常に気になる存在であり、関心の的であったということである。浜楸に対する強い関心を示す。

○沖つ浪まの浜楸―浜楸は、本歌では序詞内の景物で、本旨の「ひさしく」に同音で掛かっていく役割を果たしていた。本歌では、恋の相手に久しく会えないもどかしさを、浪間に隠見する沖の小島の浜に生えている楸のイメージが彩っていた。浜楸は、浜に生える楸。楸は、きささげ（木豇豆）或いはあかめがしわ（赤芽柏）の古名といわれる。3ではそれを実景に変えている。本歌の面影から恋の気分が揺曳する。また、浜楸は沖の小島に生えているはずであるが、3では島を言わず、直接に沖の浪間の浜楸を提示する。「沖つ浪ま」は「月落ちかかる沖つ浪まに」出観集 六一八、「沖つ浪まに消ゆる舟かな」実家集 三五〇、「沖つ浪まに風たちて」忠良 正治百首 七四七）の例があるが、いずれも3ほどには浪間に見えるものへの強い関心を示したのではない。沖遠く、そのうえ浪に見え隠れして、姿を見るのが難しい浜楸である。題「遠樹」に相当する。

○ひさしく見せぬ春霞哉―「浜楸ひさしく」は本歌の序詞―本旨の接続部分をそのまま生かす詞続きである。「ひさしく見せぬ」は、浜楸を春霞が隔て隠して長い間見せないの意。題「霞隔」にあたる。

## 4

○高瀬さす―高瀬は川の浅いところ。浅瀬。さすは、棹さすの意で、舟の渡りゆく様子をいう。

○六田の淀―大和の国の歌枕。吉野川の渡し場。柳は次の一七二七番歌に詠まれる。

・河蝦鳴 六田乃河之 川楊乃 根毛居侶雖見 不飽河鴨（絹 万葉集 卷九 一七二七）

・音聞 目者未見 吉野川 六田乃与杼乎 今日見鶴鴨（万葉集 卷七 一一〇五）

六田の柳は、新古今時代の例もある。

・五月雨に六田の淀の河柳うれこす波や滝の白糸（「五月雨」林下集 七五）

・つららある六田の淀の柳かげさでさすしづもとくこほりけり（寂蓮 無題百首 六〇 文治初年又は五年）

○柳原―柳の多く生えている野原。河原や中州など、河に近い場所として詠まれている。題の「遠樹」にあたり、「原」と広くとらえた措辞

により、遠景に広がる緑に芽吹いた柳の木立を提示する。

・影しげき野洲の河原の柳原こだかく蟬の声さわぐなり（出観集 二六四）

・柳原川風吹かぬ蔭ならばあつくや蟬の声にならまし（山家集 一〇一九）

・筏士のこなたかなたへこす竿のしづえをさふる柳原かな（長方集 四四）

○みどりもふかく霞む春かな―霞は普通、緑・浅緑色とされる。

・浅緑のべの霞はつつめどもこぼれてにほふ花桜かな（菅家万葉集 の中」拾遺集 春 四〇）

また霞は、  
・春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花の影かも（興風 古今集 春下 一〇二）

のように、それを透かしてももの色を映すものである。ここでは、もともと浅緑色の霞も、柳の緑を映して濃い色で霞んでいる様子を用う。

## 難陳・判詞

○同心の病―同心病。歌の修辞上の欠陥をいう歌病の一つ。歌病は歌経標式に七病、喜撰式に四病、孫姫式に八病を挙げる。孫姫式八病の一つ。一首中同じ意味（心）の語が重出すること。ここでは「ながめ（こし）」と「み（せぬ）」を問題にしている。俊成は、古来風体抄で、「同じこと返して二度詠むこと、また、同じ心二所詠むこと、宗と避るべきことに今はなり果てにて侍るなり。そのほかの病どもは、避りあふべきことも見え侍らず。それらを避らむとせば歌かへりて見苦しくなり侍りなむ」と言う。

・判云：…すだち、あがること同心には侍るべし。但、…病気を乍レ帯、右の可レ勝にや侍らん（六百番歌合 一八番）

これは俊成が、同心病を認めながら勝にした例である。

▽4の歌が新古今集に入集した理由について、有吉保『新古今和歌集の研究―基盤と構成―』は、新古今集の排列構成上の必要を挙げている。すなわち、対者が左大臣良経であった事と、「六田の淀」が読みならわされていないという疑問から「持」の判を受けた4の歌であるが、これ

には新古今集の撰者名注記が無く、新古今集青柳一連の八首(六五〇七八)の最中の位置(七二二)に、撰集部類期に補入されたものである。補入は、前代歌人群(六八〇七一)と当代歌人群(七三〇七五)への橋渡し役を、その内容上からも果たしうる歌が必要とされたからであった。川辺の青柳と霞を詠んでいる4(七二二)の歌は、「岸の柳」(七一)と「霞ふきとく」(七三二)とを結ぶ役目を果たしており、そのために選ばれたというのである。首肯される見解である。

## 三番

寂蓮

5 末遠き松の緑はうづもれて霞ぞ浪に浮島が原

左 右 勝

左近衛権少将定家

## 6 続古

満つ潮にかくれぬ磯の松の葉も見らくすくなく霞春かな

左歌を右申「云、「末遠き」と置けるより、すべて聞きよからぬにや。右歌を左申云、松の葉こそあまりに委しく聞こゆれ。

判者申云、「見らく」などいへる詞は、ふるき事なれど、よろしくも聞えねども、「末遠き」といへるにはまさるべくや。

## 【校異】

5 松のみとりは—松のみとりそ(神)

霞そ浪に—霞も浪に(内・青一)

うきしまか原—うきしまかはら(宮)、うきしまの原(京・北・桑)、うきしまの原(刈)

6 みつしほに—水かきに(彰)

見らくすくなく—みちくすくなく(彰)、みちくすくなく(刈)、見えてすくなく(桑)

霞春かな—かすむ松哉(宮)、霞むそら哉(刈)

## 難陳・判詞

すへてきよよからぬにや—すへてきよよからす(京・内・北・青一)

松の葉こそ—松の葉とて(中一)

見らくなといへる詞は—見らくなといへることは(刈・内・神・青

一)、見らくすくなくといへること葉(京・北)

ふるき事なれと—ふるき詞なれと(京・北)、ふるき事なれは(内・青一)、ふるき言葉なれと(宮)、わるき事なれと(神)

よろしくも聞えねとも—よろしくきこえね共(内・青一)、よろしくもきこえねと(宮・刈)、欠脱(京)

まさるへくや—勝へくや(宮・京・北)、かつへくや(刈)、勝へきにや(内・青一)

## 【他出文献】

6 拾遺愚草 春 二二四六(「建仁元年三月尽日歌合、霞隔遠樹」)・万代

和歌集 春上 三四(「後鳥羽院御時歌合に、霞隔遠樹といふことを」)・

題林愚抄 一八〇

## 【通釈】

三番 「霞、遠樹を隔つ(霞が遠くの樹を隔てる)」

左

寂蓮

5 遠い先までも続いている(遠い将来まで変わらぬ)松の緑は覆われて見えなくなつて、なんとまあ霞が波に浮いている浮島が原よ。

右 勝

左近衛権少将定家

6 満ち潮には波の下に隠れる磯の草はもちろん、満ち潮になつても波の下には隠れることがない海辺の磯の松の葉も、見えることが少ない状態で霞んでいる春であることよ。

左歌について、右が申しますことには、「末遠き」と初句においたところからして、すべて聞き苦しいことであろうか。右歌について、左方が申しますには「松の葉」という詞こそ、あまりに細かいところに目を付けているように聞こえる。

判者が申しますには、「見らく」などという詞は、(知られた)故事ではあるけれど、結構にも聞こえない。しかしながら、「末遠き」というのには勝っているとしてよいだろうか。

## 【本歌】

6 潮満てば入りぬる磯の草なれや見らくすくなく恋ふらくの多き(坂

上郎女 拾遺集 恋五 九六七・「寄藻」万葉集 卷七 一三九

四・「さうのくさ」古今六帖 三五八二・俊頼髓脳・奥義抄・

袖中抄・和歌色葉・古来風体抄・定家八代抄)

○題―引き続き三番は5、6ともに「霞、遠樹を隔つ」。

5

○末遠き―「松」にかかる。この句は普通、(小)松や若葉にかかり、時間的に将来まで遠く続く意味で用いられるが、ここではその意味を含みつつ、題の「遠樹」を受けて空間的に浮島が原の松林の緑が遠く続く様子を掛けているとみられる。しかし、その景色は霞に埋もれて見えず、また呼応する詞もないので、効果的とは思われない。右方の難陳、俊成の判詞もこのような点をいうか。

○松の緑はうづもれて―霞に松が覆われている様子をいう。寂蓮も参加していた俊成判の建久六年民部卿家歌合に

・年経たる松の緑も埋もれて谷の心に似たる雪かな(隆保 一六一)がある。

○霞ぞ浪に浮島が原―浮島が原は、駿河国歌枕。静岡県東部、愛鷹山の南方にある旧浮島沼付近一帯の低湿地。田子の浦の砂浜に沿う地帯。

富士や足柄とともに詠まれることが多い。浮島と表現されることもあり、陸奥歌枕の浮島と区別できない歌もある。松や霞とともに詠まれた歌もすでに存在する。「浪に浮く」と、「浮島」に言い掛けている。5で「浪」が詠まれるのは、湿地帯の中の沼などをイメージしているのか、浮島が原からみた田子の浦の浪なのか、判然としない。

・浮島の松の緑をみわたせば千年の春ぞ霞みそめける(「春、うきしま」元輔集 一〇四)

・東路や朝たつ空に詠むれば霞にしづむうき島の原(「歌合に、霞の心をよめる」朝恵法師 玄玉集 七五)

6

○満つ潮にかくれぬ―本歌の磯の草は、満ち潮になれば見えなくなるが、満ち潮になっても浪の下には隠れない、の意。本歌の恋の気分がほのかに漂う。

○松の葉も―「も」は累加。松の葉は、「松の葉のいつともわかぬ恋もするかな」(古今集 恋一 四九〇)などと詠まれており、その不変のイメージが、次の「見らくすくなく」との間に緊張のある詞続きをもたらす。題の「遠樹」として「磯の松」を選んだ。

○見らくすくなく―本歌の詞。見ることが少ないという状態で、の意で、結句の「霞む」にかかる。題「霞隔」に相当する。

難陳・判詞

○ふるき事なれと―新編国歌大観は「ふるき事なれば」と翻刻しているが、「ふるき事なれ」と読める。この本歌は他出文献にも指摘したように、秀歌撰や歌学書に引用されていて、有名な歌であった。「古き事」は故事。他本の「古き詞」は古語。当時、万葉語などの古い感じのある詞はみだりに使うべきでないという考えがあったことからすれば、逆接が重なる底本の本文よりも「なれば」の本文がわかりやすいようでもある。しかし、古き事を故事ととり、二重の逆接を生かして解すると、通釈のようになるうか。

四番 鞆中見花

左 持 寂蓮

7 旅の空いく夜の雲に臥しなれて思ひもわかぬ花の夕陰

右 霞隔遠樹 前権僧正慈円

8 み吉野の山の端ふかし朝霞こむる梢を雲に任せて

左歌を、右申て云、殊なる難なし。 剩頗宜敷 のよし申

云、右歌、左、又殊ニ申ス旨なし。

判者申云、左歌の姿、艶には聞こゆれど、殊に花を思へる心すくなきにや。右も又朝霞こひねがはれぬさまに侍り。持とすべし。

【校異】

7 おもひもわかぬ―思ひにわかぬ(中二・松)

花の夕陰―をかゆふ風(内・青一)、花の夕風(京・北)、花の夕景

(刈)

8 こむる梢を―こむる梢は(京・北)

雲に任せて―空にまかせて(中一・中二・松・桑)

難陳・判詞

剩頗宜敷のよし申云―底本「云」は不審。衍字、「々」の脱落、

「之」の誤写などが疑われる。あまりにさへすこふるよろしきかのよし申之(宮)、剩頗宜敷之由申(京・刈・桑・中一・中二・北・

松)、剩頗宜歎のよし申云々(彰)、頗宜歎之由申(内・青一)

艶にはきこゆれと一ゆうにきこゆる(内・青一)、えむにはきこゆるを

(宮)、えむにはきこゆるを(刈)、えんにはきこゆるを(京・北)

殊に花を思へる心すくなきにや一故郷の花をおもへる心のなきにや

(青一「故郷」に「本ノ」と傍注・内「故歎」と補入)、殊花をし

る心すくなきにや(神)、ことに花を思へる心すくなきや(刈)

あさ霞一あさ霞など(宮・京・北)

こひねかはれぬさま一こひねかはぬさま(内・桑・中一・中二・青

一・松)

【通釈】

四番 羈中、花を見る(旅にあつて、花を見る)

左持

寂蓮

7 旅の空でいく夜も旅寝を重ね、雲の中に臥すことにもなれて(そのために)雲と見分けがつかなくなっている夕暮れ時の花の木陰であるよ。

8 右 霞、遠樹を隔つ(霞が遠くの樹を隔てている)前権僧正慈円吉野山の山の端が奥深く見える。朝霞がその中に籠める木々の梢を山の端の雲の籠めるに任せて。

左歌について、右方が申しますことには、特に難はない。そればかりか、極めて結構だと思ふよしを申します。右歌について、左方もまた特に申すべきことはない。

判者が申しますには、左歌の姿は艶な美しさをもっていると思われるけれども、特に花を思っている心が少ないでしょうか。右もまた、朝霞の詠み方が、このように詠みたいと強く願われるというのではない様子で詠まれています。引き分けとすべきだろう。

○題一題の異なる一番。左の「羈中見花」は、「旅先で花を見る」の意。

この題は、本歌合以前には、重家集に「内大臣殿には 羈中見花」(三〇三)の例がある。類似の題に「旅客見花」(後拾遺集 一〇九)「羈中花」(仙洞五十首歌合)がある。右は「霞隔遠樹」。

7

○旅の空一「空」は、第二句の「雲」とひびきあつて、実際の空をイメ

ーじさせながら、旅にある境遇をもいう。和歌史の上では雁などの空の旅の様子をいう歌からはじまり、比喩的にこのような表現が詠まれてくる。

○いく夜の雲に臥しなれて一山を越えてゆく旅寝を重ねたさまをいう。幾晩も山中に旅寝を重ねて雲の中に臥すことになれて、の意。雲は雁や月、ひいては人に宿をかすものであつた。

・ひきつらね旅の空なる雁がねは雲のうへにや宿はかるらん(式部祿子内親王家歌合 一六)

・宿からんゆくへもみえぬ旅の空雲をたのむ野辺の夕暮(隆信 御室五十首 四四六)

・月影はくまなきものを尋行く人はいづくの雲に臥すらん(出観集 四一七)

山中の宿りを詠む例を挙げる。  
・雲に臥す人の心ぞしられぬるけふ小初瀬の奥の山踏み(秋篠月清集 一八七 二夜百首 建久元年)

・これやさは都にて見し空の雲それを片敷く峰の旅臥し(後鳥羽院 千五百番歌合 二八二二)

「いく代の雲」(季保 正治後度百首 七五一)が一例あるが、「いく夜の雲」はこの例のみである。三句まで題の「羈中」にあたる。

○思ひもわかぬ花の夕陰一「思ひわく」は物事に対して適正な理解や判断をすること、違いなどを見分けることである。「思ひもわかぬ」はそれと識別できない、見分けられないことをいう。

・郭公思ひもわかぬ一声を聞きつといかが人に語らん(山家集 一九三)

これは、幻聴かと思われはつきり確認できない郭公の一声をいう。7は、雲と花の伝統的な比喩関係を踏まえて、花がまるで臥しなれた雲の中にいるようでそれと区別できないさまを表現する。

「花の夕陰」は、「花の夕影」として、源氏物語若菜上巻の、女三宮に恋を募らせる柏木歌の例があり、その連想が俊成に「艶」の評語を使わせたのかと思わせる。

・よそに見て折らぬなげきは茂れどもなごり恋しき花の夕かげ(四八一)

7では、夕暮れ時の、旅人がそこに宿ることになる花の木下陰をいう。

8  
○み吉野の山―吉野山は、大和国歌枕。

○山の端ふかし―この表現は他に見られない。山の稜線が霞によって奥深く沈んで見えるさまを表現する。山の端に見える木の梢を「遠樹」とする。

○朝霞こむる梢を雲に任せて―朝霞がその中に籠める木々の梢だが、それを山の端にかかる雲が籠めるのに任せてしまつて、の意。雲が思うままに木々の梢にかかつている様子をいうか。雲のために朝霞の存在感が薄くなっているような詠み方である。

▽双方の方は難点を指摘しなかったのに、俊成が両歌の欠点を指摘して引き分けにした例である。どちらにも、題に照らして、7では「花」が、8では「霞」が軽視されている点を指摘しており、俊成の歌題に対する見識がうかがわれる判定である。

五番 羈中見花

左勝

左大臣

9 けふも又桜さくらに宿しゆくをかり衣きつつなれゆく春はるの山風かぜ

右 霞隔遠樹

左近衛権少将雅経

10 唐錦秋からの形見かたみをたちかへて春はるは霞あきの衣手ころもての森

左歌を、右、殊ニ申す旨なし。右歌、左、申ま云い、春はるの霞あきの歌

に「唐錦秋の形見」と置ける、よしなくや。  
判者、左をもて為ス勝ト。

【校異】

9 かり衣りから衣り (刈)

10 秋のかたみを―秋のかたみと (神・彰・青二)、秋のかたみに (刈)

難陳・判詞

はるの霞の歌―霞の歌に (京・北)

あきのかたみと―秋のかたみにと (刈)、秋のかたみに (桑・中一・

中二・松)

よしなくや―よしなしとや (宮)

【他出文献】

9 秋篠月清集 春 一〇一一 (「同歌合に、羈中花」)

10 明日香井集 一〇五六 (「新宮撰歌合 同三月廿九日作者隱名、霞隔遠樹」・詠歌一体 一〇

【通釈】

五番 羈中、花を見る (旅にあつて、花を見る)

左勝

左大臣 (良経)

9 今日もまた、桜 (の花の木陰に) 宿を借ることになった。旅の狩衣は着ているうちになれてゆくが、木陰に来て宿ることが重なるにつけ、春の山風にも次第になれてゆくことだ。

右 霞、遠樹を隔つ (霞が遠くの樹を隔っている)

左近衛権少将雅経

10 秋の残した形見の唐錦を裁ちかえて、春には霞が立ち、霞の衣を着る衣手の森よ。

左歌について、右方は、特に申すことはない。右歌について、左方が申しますことには、春の霞の歌に、「唐錦秋の形見」と言っているのは、不適切だろうか。

判者は、左歌をもつて勝ちとする。

【本歌】

9 唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ (男伊勢物語 第九段 一〇)

10 唐錦枝にひとむら残れるは秋の形見をたためなりけり (「散り残りたる紅葉を見侍りて」僧正遍昭 拾遺集 冬 一二二〇)

○題―四番同様、左は「羈中見花」、右は「霞隔遠樹」の、題の異なる一番。

9 ○けふも又桜に宿をかり衣―「けふも又」は、同じような日が続いており、今日もまた同じように、ということである。「かり衣 (狩衣)」「宿を借る」の意を掛ける。桜の下で旅寝することが続いている様子。先行例には次の歌がある。

・けふも又花みて暮らす旅人の春のとまりは樹なりけり (「屏風の絵

を見て人々歌詠むに、春の花のもとに旅人馬よりおりてみたと  
ころ」為仲集 八)

「宿をかり衣」の掛詞は次の定家の例がすでにあり、後にも愛用されて  
いる。

・いづこにか今宵は宿をかり衣日もゆふ暮の峰の嵐に（「正治元年冬  
左大臣家十首歌合、羈中晚嵐」拾遺愚草 二六七九）

・天川かは瀬に宿をかり衣交野の冬の雪の夕暮（後鳥羽院御集 三六  
二 建仁元年外宮歌合）

○かり衣きつつなれゆく春の山風―第三句「かり衣」は上下に働いてい  
る。「かり衣」「きつつなれ（ゆく）」「はる」と続けることにより伊  
勢物語歌を連想させ、その旅情を背後に漂わせる。狩衣を着ていると  
衣がなれるのだが、そのように次第になれてゆく春の山風である、の  
意。

10 ○唐錦秋の形見をたちかへて―冬に残っていた秋の形見の唐錦を裁ち変  
えて、の意。本歌の次の季節を詠む。「唐錦」は唐織りの錦で、紅葉  
を喩える。唐錦・裁つなど、すべて下句「衣手の森」の「衣」の縁語。  
「錦を裁つ」は、下句では「霞が立つ」の掛詞として働く。

○春は霞の衣手の森―春は霞が立ち、霞の衣を着る衣手の森よ、の意。  
霞の衣は、霞を衣に見立てた表現で、次の歌がよく知られている。

・春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべらなれ（在原行平朝臣  
古今集 春上 二二三）

「衣手の森」は、古来諸説あるが、京都市右京区の松尾大社の撰社の  
一つである「衣手社」の森か。早い例は、

・春は花秋は紅葉と誘はれて人の立ち寄る衣手の森（「あるところよ  
り、衣手の森といふ所を絵に描かせ給ひて、詠みに給はせたりし」  
中務集 二五四・馬内侍集 一四一）

その名称から、「衣」の縁語を駆使して詠まれることが多い。  
▽為家の八雲口伝（詠歌一体）には10の歌について歌合の難を踏まえて  
次のように言っている。

此歌は歌合に難ぜり。すべて歌がらもこひねがはず、衣手の森をし  
いださむと作りたる歌也。昔は歌にも対をとるなど申しければ、さる

事もあるべし。

春がすみかすみていにし雁がねはいまぞなくなる秋ぎりのうへに  
ほととぎすなくや五月にうゑし田をかりがねさむく秋ぞくれぬる  
これらも強ちにこひねがはず。

六番 羈中見花

左持 散位有家

11 都より吹こむ風のをとづれも花にはつらき山路なりけり  
右 宮内卿

12 古郷のたより思はぬながめかな花散る比の宇津の山越え  
左歌、右申 云、「吹こん」といへる、「風のをとづれ」耳にた  
ちて聞こゆるにや。右歌、左申云、「ながめかな」といへる、「な  
がむれば」などとこそ古くも詠みならはして侍れ、「ながめ」とい  
ふ物の有やうにや聞こゆるん。

判者申云、「宇津の山越え」、伊勢物語にも、「薦かへで茂りて」  
などこそ申たれ、花には詠みならはさずや侍らん。右方人、  
当時桜多く咲きたるよし陳申せども、「ながめ」殊に心ゆかずと  
て、持とす。

【校異】

11 吹こむ風の―吹らん風の（神）、吹らん風の（刈）、ふきこす風の  
（内・青一）

をとづれも―をとつれて（内・青一）  
花にはつらき―春にはつらき（京）

難陳・判詞

吹こんといへる―吹らんといへる（神）、吹こむとをける（宮・刈・  
京・北）、吹こす風とをける（内・青一）

耳にたちてきこゆるにや―耳に立てきこゆ（内）、耳に立てきこゆる  
（青一）

ふるくもよみならはして侍れ―ふるくもよみならはしたれ（宮・刈）、  
ふるくもよみならはしたるに（京・北）、ふかくもよみならはして侍  
れ（彰）、ふるくもよみならはして侍れ（中一・中二）、ふるくよみ

ならはしたれ (内・青一)

うつのやまこえ—うつの山を (宮)

つたかへてしけりてなとこそ申たれ—かえてしけりてなとこそ申たれ

(内・青一)、つたかえてしけりなとこそ申たれ (桑・中一・中二・

松)

花にはよみならはさすやはへらん—花によみならはかさすやはへらん

(宮・刈)、春にはよみならはかさすや侍 (内)、春にはよみならは

さすや侍 (青一)

当時桜おほくさきたるよし—当時おほくさきたるよし (内)、当時おほ

くきゝたるよし (青一・青二)、たゞし桜おほくさきたるよし (京・

北)、当時桜おつくさきたるよし (神)

陳申せとも—のへ申せとも (京・北)、陳申と也 (宮)、陳申せと

(刈)、陳申をとも (神)、陳申を (内・青一)

なかもことに心ゆかすとして持とす—なかもまことに心ゆかす持とす

(京・北)、なかもまことに心ゆかすとして為持 (宮・内・青一)、

なかも誠心ゆかすとして為持 (刈)

【他出文献】

12 夫木和歌抄 春四 一三八七 (「建仁元年十首歌合、羈中見花」)

【通釈】

六番 左持 羈中、花を見る (旅にあつて、花を見る)

左持 散位有家

11 都から吹いてくるだろう風の訪れも、(人には嬉しいものだが) 花

に対しては恨めしくつらい旅の山路であることよ。

右 宮内卿

12 (常なら風は都のたよりと思うのだが) 都のたよりととは思わないな

がめであるよ。花が散るころに宇津の山を越えていくのは。

左歌について、右方が申しますには、「吹きこむ」と言っている

ことについてだが、(そのために) 「風のおとづれ」が耳ざわりに

聞こえるだろうか。右歌について、左方が申しますには、「ながめ

かな」と言っていることについてだが、「ながむれば」などとこそ

は古くからも詠みならわしておりますけれども、「ながめかな」と

いうと、「ながめ」という物があるように聞こえるだろうか。

判者が申しますことには、「宇津の山越え」ですが、伊勢物語に

も「蔦かへで茂りて」などこそ申しておりますが(花は登場しま

せんので)、花(の歌)には(宇津の山を)詠むならわしはなかる

うかと思ひます。

右の方人は、現今は(宇津の山には)桜がたくさん咲いているむ

ねを主張しましたが、「ながめ」が特に納得がゆかないとして、引

き分けとする。

【本説】

12 ……ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入

らむとする道はいと暗う細きに、蔦かへでは茂り、もの心細く、す

ずるなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、

いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その

人の御もとにとて、文かきてつく。「駿河なるうつの山辺のうつつ

にも夢にも人にあはぬなりけり」(伊勢物語 第九段)

○題—11、12は左右同題で、「羈中見花」。

11 ○風のをとづれ—風の吹いてくることを人の訪れてくることに喩えてい

う語であるので、「吹きこむ」という修飾語は贅語になる。右方の申

状はそこを指摘しているのであろう。

12 ○花にはつらき—「は」は、花を取り立てることで、花以外のものを暗

示する。なつかしい都から吹いてきた風は旅人には嬉しいものである

が、花にとつては散らす風であるからつらく恨めしい、の意。

12 ○古郷のたより思はぬ—伊勢物語第九段宇津の山で旅の男は、都で見知

った修行者に偶然出逢い、京の思い人のところに文を言付ける。「風

のたより」は消息などを伝える使者に喩えられる。ここでは、伊勢物

語の修行者にあたるのが風であろう。次の雅経歌も、宇津の山風を

「古里のたより」として参考になる。

・古里のたよりとならば言づてん袂にむかふ宇津の山風(雅経 正治

後度百首 二七三)

ここでは、「たよりおもはぬ」であるから、古里のつてだと思わない

の意であろう。「たより(と)思はぬ」の意と解せられる。つまり、下句の風景は、風を情けある古里の使者だと思わせないという意味を表していると考ええる。

○ながめかな—この句は、明日香井集、拾玉集に多数見出され、新古今時代の先行例も多い。

・花ゆゑにいとふ物までながめかな隔つる霞散らす山風(拾玉集 一三三 花月百首 建久二年)

宮内卿には12に先行する二例がある。

・五月雨の雲にも霞むながめかな遠山の夕暮の空(「五月雨」正治後度百首 八二二 正治二年)

・思ふさへ曇らぬ夜半の詠かなをばすて山のいにしへの空(老若五十首歌合 二四八 建仁元年二月)

六百番歌合十一番左の有家歌  
・天の原春とも見えぬながめかな去年の名残の雪の曙(二二)の判詞において、俊成は、「判云……このながめかなといふ詞の近來見え侍る、未甘心おぼえ侍り、定めてひが心に侍らんかし」と批評している。本歌合の左方の言い分も、俊成の意向も同様の趣旨である。

○花散る比の宇津の山越え—「花散る比」は、花を散らす風を最も厭う。為家の詠歌一体「先達加難詞」に「ながめ」が入っている。

▽俊成の、歌枕と景物の関係についての見解がうかがわれる判詞である。

七番 左 雨後子規  
右 勝 羈中見花

13 村雨の晴るゝ雲間に時鳥月影契る小夜の一声  
左 近衛権中将通具  
右 勝 羈中見花 雅経

14 新古  
岩根ふみ重なる山を分捨て花もいくへの跡の白雲  
左 歌、右方申 「云、「月影契る」とはいかに契れるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申。

判者、右もて勝(と)す。

【校異】  
14分捨て—分捨て(宮)、わけすきて(内・青一)

難陳・判詞  
いかにちぎれるにか—いかに契ることありや(青一)、いかに契ることあり(内)、いかに契にか(宮・京・刈・北・彰・松・桑・中一・中二)

右もて勝す—他本により「右もて勝とす」と校訂。以右為勝(宮・内・刈・青一)、以右勝とす(京・彰・北)、右をもて勝とす(神)、右を勝とす(桑・中一・中二・松)

【他出文献】  
14 新古今集 春上 九三(「和歌所歌合に、羈旅花といふことを」)・明日香井集 一〇五七(「新宮撰歌合 同三月廿九日作者 匿名、羈中見花」)・題林愚抄 九五九

【通釈】  
七番 左 雨後の子規(雨の止んだ後に鳴く時鳥)  
右 勝 羈中、花を見る(旅にあつて、花を見る) 雅経

13 ひとしきり降った村雨の晴れた雲の間から出てきた月影と約束があるように村雨の晴れ間に聞こえてきた時鳥の夜の一声よ。

14 大きな岩を踏み越えてゆく幾重にも重なった山々に分け入り分け捨てて、振りかえると、花もまた幾重の白雲となつて後の方に続いていることだ。

左歌について、右方が申しますことには、「月影契る」というのは、どのように契るといふのか。右歌について、左方は、欠点が無い上に結構である旨を申します。

判者は、右をもつて、勝ちとする。

【本歌】  
14 岩根ふみ重なる山はなけれども逢はぬ日数を恋ひやわたらむ(坂上 郎女 拾遺集 恋五 九六九・万葉集 卷十一 二四二二 「雖不有 不相日数 恋度鴨」・童蒙抄 一七二「重なる山にあらねどもいはぬ日あまた恋ひわたるかも」・伊勢物語第七四段

14 新古  
岩根ふみ重なる山を分捨て花もいくへの跡の白雲  
左 歌、右方申 「云、「月影契る」とはいかに契れるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申。

13 村雨の晴るゝ雲間に時鳥月影契る小夜の一声  
左 近衛権中将通具  
右 勝 羈中見花 雅経

14 新古  
岩根ふみ重なる山を分捨て花もいくへの跡の白雲  
左 歌、右方申 「云、「月影契る」とはいかに契れるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申。

13 村雨の晴るゝ雲間に時鳥月影契る小夜の一声  
左 近衛権中将通具  
右 勝 羈中見花 雅経

14 新古  
岩根ふみ重なる山を分捨て花もいくへの跡の白雲  
左 歌、右方申 「云、「月影契る」とはいかに契れるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申。

13 村雨の晴るゝ雲間に時鳥月影契る小夜の一声  
左 近衛権中将通具  
右 勝 羈中見花 雅経

14 新古  
岩根ふみ重なる山を分捨て花もいくへの跡の白雲  
左 歌、右方申 「云、「月影契る」とはいかに契れるにか。右歌、左、難なき上によるしきよしを申。

「重なる山にあらねども逢はぬ日多く恋ひわたるかな」・定家人  
代抄)

○題―左は「雨後子規」、右は「鞆中見花」の異なる題の一番。「雨後子規（郭公・時鳥）」が題として見えるのは本歌合が最初。

13 ○村雨―ひとしきり激しく降って通り過ぎる雨のこと。時鳥と村雨が詠まれた早い例は源氏物語にある。

・なき人をしのぶる宵の村雨に濡れてや来つる山時鳥（光源氏 幻 五七五）

村雨は、八代集では万葉歌一例を再録した拾遺集以後、千載集二例、新古今集五例と増加、平安後期にその情感が見直された題材。

○雲間―空間的には雲の絶え間、時間的には雨のあがった時をいう。空間的には月の光がもれる雲の絶え間であり、時間的には、時鳥の一声の聞こえてきた村雨の晴れ間である。

○月影契る小夜の一声―右方が「いかに契れるにか」と疑問を発しているように詞足らずでわかりにくい。村雨の後、雲間から月影が射すのと同時に約束でもしたかのように時鳥の一声が聞こえてきた様子を感じたのか、と推測する。「小夜の一声」は、待たれ待たれて聞く時鳥の貴重な一声を表現する常套句。

▽和歌史の上で、賞美の対象として期待される景物のとりあわせとして、時鳥と月が固定されるようになるが、その中で、それらを擬人化して、時鳥が月を待ったり、互いに誘いあったりするという発想の歌が出てくる。時鳥の出現する五月雨や村雨の時分には、月を見ることが稀なので、その折の両者の風情も好んで詠まれた。新古今時代以後に例が多い。13もその線上に詠まれた歌である。

・有明の月やまちつる時鳥、夜ぶかき空を鳴きて過ぐなる（「郭公」拾玉集 四四八九）

・五月雨の雲に成行く夏の夜の月影しのぶ時鳥、かな（拾玉集 二九九〇）

・五月雨の月はつれなき深山よりひとりも出づる時鳥、かな（藤原定家朝臣 新古今集 夏 一三五・老若五十首歌合 建仁元年二月）

本歌合においても、次の讃岐歌20や良経歌17はそれである。

・五月雨の雲間の月の晴れ行くをしばし待ちける時鳥、かな（20 新古今集 夏 二三七）

・五月雨をいとふとなしに時鳥、人に待たれて月を待ちける（17 秋篠月清集 一〇六二）

14 13 14 九集 平成三年（二月）に詳しい。

○岩根ふみ重なる山―岩を踏み越えてゆく幾重にも重なった山々の意。巖（いはほ）が高く聳えているような岩であるに對して、岩根はどつしりと地面に根を下ろしたような安定した岩をいう。山に登るとき踏みしめていく岩盤。本歌においては、恋愛の障害となるものの比喩であるが、14はそれを困難な旅の道の実景に変化させている。

○分捨て―分け入っては分け捨て、の意。果敢に後戻りしないで旅路を先へ進む様子である。この句は、正治初度百首の慈円歌が初出例。

・さ牡鹿の夏野の草を分けすて太山の秋にうつる初声（六四〇）

○花もいくへの跡の白雲―「も」は上句の「重なる山」の幾重に對しての累加を表す。「白雲」は遠山桜の比喩。花も、山の連なりそのままに幾重の白雲となつて後の方に連なつていくという意。

難陳・判詞

○いかに契れるにか―どのように契っているというのか、の意。「月影契る」という表現の意味が曖昧であることを指摘する発言である。